

論文作成の手引き ー注のつけ方ー

研究論文は、言いたいことを「好き勝手に」書けばよいというものではありません。自分の選んだテーマにそくして、資料や文献を読み、それらに依拠しながら議論を展開するものです。したがって研究論文では、依拠した資料等の出典をしめす注が不可欠なものとなります。論文の最後に参考とした資料・文献を列挙する（これも必要ですが）だけでは不十分です。

注にはいくつかの種類がありますが、ここではもっとも基本的な「引用注」のつけ方について説明します。引用注とは、論文中に引用した資料あるいは文章の出典を示す注です。参考文献中の文章をそのまま引用せず、要約して論文に利用した場合にも、出典を示す注が必要です。このような注を付けないまま、参考文献中の文章を利用した場合には、「剽窃」あるいは「盗作」の批判をまぬがれませんので、注意してください。以下に引用注の付け方を例示しますので参考にしてください。

I. 参照箇所や引用には必ず注番号を付け、出所を明記する。注は本文の文末に、所定の形式で注番号順に記載する。

- ① 注番号は通し番号とし、参照箇所や引用の直後につける。
- ② 単行本や雑誌の書名の表記は次の方式による。和書は、『 』でくくり、洋書はイタリック（斜体文字）で書く。
- ③ 論文名は、和書は「 」で、洋書は“ ”でくくる。
- ④ 初めて出てきた単行本の場合は、執筆者姓名『書名』発行所、発行年、頁、そして最後にピリオドの順で表記する。なお、洋書の場合は、カンマ（,）の後にスペースを1つ入れること。
- ⑤ 初めて出てきた論文の場合は、執筆者姓名「論文名」『雑誌名』巻号数、刊行年、頁、そして最後にピリオドの順で表記する。なお、同名の雑誌がある場合は発行所を明記する。
- ⑥ 頁の表記は、p. xx または pp. xx-xx とする。ただし、和書の場合は、〇〇頁とか〇〇－〇〇頁としてもよい。
- ⑦ 続けて同一の文献や論文を引用する場合は簡略表示する。和書は、同上（同書、同上書、同訳書、同上訳書、同論文、同上論文も可）、洋書は、Ibid.（ラテン語の Ibi den（同じ場所に）の略）と表記する。
- ⑧ 新聞記事、インターネット資料の表記についても以下に記す。

Ⅱ. 「注」の実例

- (1) 織田正吉『笑いのこころユーモアのセンス』岩波書店、2010年、24頁。
- (2) 同上、72頁。
- (3) 中井宏次「笑い和社会現象」(特集 日本人と笑い)『国文学 解釈と鑑賞』75(5)、2010年、133-140頁。
- (4) 織田、前掲書、180頁。
- (5) 中井、前論文、136頁。
- (6) 代表的な事例としては以下のものが挙げられる。○○○○○○。
- (7) 金成垣「格差社会の中の韓国の若者」『社会福祉研究』114、2012年、pp.92-97。
- (8) Hass, Jeffrey K. *Economic sociology : an introduction*, Routledge, 2007, p.37.
- (9) *Ibid.*, p.153.
- (10) Hacker, Jacob S. “The politics of risk privatization in U.S. social policy”, in Landy, Marc K., Martin A. Levin and Martin Shapiro ed., *Creating competitive markets : the politics of regulatory reform*, Brookings Institution Press, 2007, pp.83-109.
- (11) 「東日本大震災2年」下『日本経済新聞』社説 2013.3.11(月)・朝刊(2)
- (12) 八代地域振興局ホームページ「2013第6回菜の花ウォーク in やつしろに参加しませんか!」更新日:2013年3月6日
<http://www.pref.kumamoto.jp/site/yatsushiro-hp/> (2013.03.18入手)

図書館2階、3階にある雑誌・紀要に掲載されている専門家の研究論文を実際に参照されることをお勧めします。

また、参考文献(本学所蔵)として

- ・経済学部シラバス「卒業論文作成の手引き」
- ・澤田昭夫『論文のレトリック—わかりやすいまとめ方』(講談社学術文庫)、講談社、1983
- ・河野哲也『レポート・論文の書き方入門 第3版』慶應義塾大学出版会、2002
- ・小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術 新版』(講談社現代新書)、講談社、2009.
- ・戸田山和久『論文の教室—レポートから卒論まで 新版』(NHKブックス)、NHK出版、2012.
- ・白井利明・高橋一郎『よくわかる卒論の書き方 第2版』ミネルヴァ書房、2013.
- ・DVD版『情報の達人:第3巻 レポート・論文を書こう!—誰にでも書ける10のステップ』(図書館2階AVコーナー所蔵)を紹介します。

論文の執筆にあたっては、上記図書や他の類書を一読され、論文の基本ルールや文献・資料の収集について参考にしてください。